

復興から未来をつくる 若いチカラを育てていく!

震災当初から岩手県立大学は、被災地の大学として様々な支援活動を展開し、沿岸の復興に寄り添ってきた。その中でも大きな柱として取り組んでいるのが、「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」である。

これは被災地のコミュニティ支援と学習支援、ボランティアに携わる人材育成に取り組む活動だ。震災から5年の節目に、この事業に焦点を当て、本学の復興支援の歩みを総括してみたい。



学生を対象とした「コミュニティ支援力養成研修会」の様子。昨年3月は2014年の広島土砂災害の地で学生の役割を考えた。



「いわてGINGA-NET」プロジェクトに参加した学生は、支援活動に入る前に必ず被災地を視察し、現状を把握する。



昨年9月に発生した関東・東北豪雨災害で被害を受けた栃木県と茨城県で、「風土熱人R」の学生有志が支援を行った。



学習支援を行う「学びの部屋」は、陸前高田市、大船渡市、釜石市、宮古市の4市で実施。学校や公民館などを利用している。



本学と「子どものエンパワメントいわて」が実施する「学びの部屋」では、子どもに寄り添いながら学習を支援。将来の進路をサポートしている。

**震災は学生たちの背中を押し、
新たな学びを与えてくれた**

平成23年3月11日、岩手を襲った東日本大震災。発生当初、県立大学では直ちに災害復興支援センターを立ち上げるなど、具体的な手だてとタイミングを計っていた。一方、被災地には全国からボランティアや調査団が集結。受け入れ態勢が整っていない現地は混乱し、被災者への負担が増しつづけた。

このような状況下で、本当に必要なとされる支援を行うため、震災から3日後にいち早く立ち上がったのが学生ボランティアセンターである。活動の中で学生たちは被災地に若手ボランティアが不足していることを知り、NPO法人等の協力を得て「いわてGINGA-NETプロジェクト」を発足。支援に向きたくとも宿泊や移動に不安を持つ全国の学生ボランティアを受け入れ、被災地に派遣する仕組みをつくったのである。

宿泊・活動拠点を住田町の五葉地区公民館に置き、平成23年4月27日から5月8日まで、最初のプロジェクトを実施。全国から13大学延べ512名の学生が滞在し、沿岸部でボランティア活動を行った。その後は、学生たちの長期休暇を利用して、夏休み・冬休み・春休みに支援活動を実施。これまで延べ1万6000人以上の学生が全国から参加し、応急仮設住宅を中心とした「コミュニティ支援活動を行っている」。

**学生たちの支援活動をサポートし、
復興を担う人材へと育てていく**

震災は多くの人々の環境を大きく変えた。特に子どもたちは、学校の運動場が仮設住宅となったり放課後の遊び場がなくなるなど、居場所を失った。そんな子どもたちをケアし、安心して学べる場をつくるために、本学では一般社団法人「子どものエンパワメントいわて」と協働し、学習支援を通じて夢の実現を応援する取り組みをスタート。このプロジェクトを「学びの部屋」と名付け、平成23年11月から学習支援を行っている。

子どもたちに寄り添うのは、地元の学習支援相談員と本学をはじめとした学生ボランティア。現在は、沿岸部の4市で実施しており、地域のニーズを踏まえながら「学びの部屋」を徐々に増やしている。

先に紹介した「いわてGINGA-NETプロジェクト」は、それまでの活動を引き継ぐ形で、平成24年2月に学生有志が中心となりNPO法人「いわてGINGA-NET」を発足。一方、「子どものエンパワメントいわて」も、在学中から活動に関わっていた学生が、卒業後に理事として参加。実質的な運営責任者として活動を支えている。

本学では、このような支援活動へのサポートを通じて、復興をけん引する学生ボランティアを育成。彼らの主体性を育むことによって、復興から地域の未来を担う人材へとつなげていきたいと考えている。